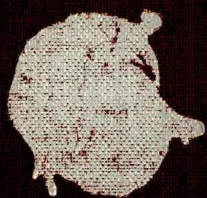


北村透谷

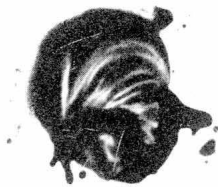
桶谷秀昭



近代日本詩人選 1

北村透谷

桶谷秀昭



筑摩書房

桶谷秀昭（おけたにひであき）

一九三二年東京に生れる。一九五五年
一橋大学社会学部卒。評論家。著書に
『ジエームス・ジョイス』（紀伊國屋書
店）『近代の奈落』（国文社）『夏目漱
石論』『批評の運命』『ドストエフスキ
イ』（河出書房新社）『天心 鑑三 荷
風』（小沢書店）『風景と記憶』（彌生
書房）『中野重治 自責の文学』（文藝
春秋）などがある。

北村透谷 近代日本詩人選 I

一九八一年十一月二十五日 初版第一刷発行

著者 桶谷秀昭

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号一〇一一九一

電話 〇三（二九一）七六五一（営業）

〇三（二九四）六七一一（編集）

振替東京六一四一二三三

印刷 明和印刷 製本 和田製本

©1981 Hideaki Oketani

0392-13901-4604

目次

第一章	アンビションと初期漢詩	三
第二章	回 心	元
第三章	『楚囚之詩』	五
第四章	バイロンの翳	七
第五章	『蓬萊曲』(一)	二二
第六章	『蓬萊曲』(二)	二四
第七章	恋愛と風流——批評文(一)	二八
第八章	自然と社会——批評文(二)	二九
第九章	最後の抒情詩	三六
	年 譜	二六七
	参考文献	二七五
	あとがき	二八三

北村透谷

第一章 アンビションと初期漢詩

透谷に『富士山遊びの記憶』という、生前未発表の紀行文の草稿がある。この草稿には短かい後書きがついていて、「明治十八年夏中昼寝の隙を見て起草す、但し当分清書せぬ者に候」とある。ところで、この紀行文の中に五言と七言を交互に組み合わせた変体的な漢詩がある。

四望意気豪

山是不高氣是高

四を望めば意気豪なり
山是れ高からず氣是れ高し

仰天有涯地亦狭

天を仰げば涯あり地また狭し

心淵独恂々

心淵 独り恂々たり

代枕好有月

枕に代わるに月あるを好む

入夢枕上神出没

夢に入り枕上に神出没す

面是如月容如花

面は是れ月の如く容は花の如し

向我將何曰

問我何國人

道是男兒国之民

男兒国今在何處

不見地球濱

是在地球外

皇々明光無汚穢

不能知是人与神

男兒最可尚

神問男兒仙

如今宮宮有何邊

則応雲間東方国

伴神共降天

万里駕雲隊

飄蕩踏躑南又北

遙得我国瞥一視

嘲容見神態

我に向いて將に何をか曰わむとす

我に問う 何れの国の人ぞ

道う 是れ男兒の国の民なり

男兒の国いま何処に在りや

地球の浜に見えず

是れ地球の外に在り

皇々たる明光 汚穢なし

是れ人と神と知る能わず

男兒 最も尚ぶべし

神 男兒の仙に問う

如今 宮宮「すまい」どの辺にあるや

則ち応う 雲間東方の国と

神を伴い共に天を降る

万里雲に駕し墜つ

飄蕩として踏躑す南また北

遙かに我が国を瞥一視し得て

嘲容 神態に見わる

当年氣不盈

当年 氣盈みたず

男兒心腸追日輕

男兒の心腸日を追て輕し

美酒為池悉沈醉

美酒池を為し悉く沈醉す

我独咄一驚

我独ひとりり咄とつ 一驚す

神則整奇藥

神則すなわち奇藥を整うれば

醉漢比起交雄躍

醉漢 比ならび起たちて交こも雄躍す

此藥能振男兒心

此の藥 能よく男兒の心を振い

使胸中綽々

胸中をして綽しやく々しやくたらしむ

夢乎也惘々

夢乎かまた惘もう々もう

身在蓬萊高嶽上

身は蓬萊高嶽上に在り

不得奇藥我常惱

奇藥を得ず我常に悩み

尚侍五尺杖

なお五尺の杖を恃たのむ

紀行文の文脈では、富士山八合目の茶屋に泊り、明け方四時頃起きて、外に出たときの靈山の情景に感ずるところあって、右の詩をつくったことになっている。(しかし、おそらくこの詩は草稿を書いた時点でつくったものと思われる。)

その情景を紀行文は次のように描いている。「明月皓々中天に横わり、靈山四隣に塵芥なく、

「地界（此ハ天界なり）の風物山脈唯蒼々として色種なく、月の光に能く見れば相模甲斐の諸高山、蟻の如くに山麓に集りたるも景色なり、社界ハ複雑なりとハ誰が言ひし、近眼の人達（顧みて）能く思へ（富士山上より地界を見るのハ余り遠すぎる）」うんぬん。これは夜明けの山中の写生的叙景文ではない。透谷の立っている富士山八合目が、靈界であり天界であり、地上世界、社会の錯綜喧騒から隔絶した非現実界であることを強調する、仮構的文章である。そして、その非現実界が、次に来る漢詩の導入部の役割を果している。すくなくとも作者がそう意図していることがわかる。

漢詩は、夢の世界である。夢の中に現われる神は、「面は是れ月の如く容は花の如し」、月、花、雪の神、日本の伝統的美感を象徴する神である。体験としては、透谷は、八合目で、疲労と空気の稀薄とから、腹痛下痢をひきおこして、食事も碌にとらず寝てしまった。のちに『蓬萊曲』の序文の中に書いている。「回顧すれば十有六歳の夏ふりし、孤筇其絶巔に登りたりし時に、余は始めて世に鬼神ふる者の存するを信ぜんとせし事ありし。」疲労困憊して、夢にみたのは、鬼神きじん、だつたと思われる。「人面、獸身、四足、好んで人を惑はす」（『史記』五帝紀）たぐいの妖怪変化ではなかったか。

明治二十五年四月十日の夜、松島の旅館に一泊したとき、夜中に透谷の枕頭に出没した「小鬼大鬼」が思いだされる。「小鬼大鬼われを困かこめり。然れども彼等かれらは悉く暴戾ぼうれい悪逆あくぎやくなる者のみにあらず。悉く兇横なる暴威を逞うする者のみならず。中にはわが枕頭に來つて幼稚なる遊戯

をなしつ嬉笑する者もあるなり。何となく心重くなりたれば夜具の袖を挙げて一たび払ふに、大鬼小鬼其影を留めず消え失せぬ。少時にして暝笑放語傍若無人なる事前の如し。」（『松島に於て芭蕉翁を読む』）

ともかく、鬼神まじじんにせよ、大鬼小鬼にせよ、月花雪の美神とは遠い。要するに、透谷の生来の鬱病質ということもあり、旅先の疲労困憊からみた夢に、月花雪の美神よりは、鬼神まじじん、大鬼小鬼があらわれる方が、連想としては自然であることを言いたいのである。したがって、右の漢詩の夢が、夢の体験に根ざすよりは、多く虚構であることを言いたいのである。

虚構を借りて、透谷の言いたかったこと、その端的な表現は、たとえば、漢詩の前三分の一の終りあたり、第九、十句目、

問我何国人 我に問う 何れの国の人ぞ

道是男児国之民 道う 是れ男児の国の民なり

「男児国」とは、言うまでもない日本を指している。あり得べかりし日本である。その日本は今、どこにあるか。この地球上には見えない、と言うのである。

『富士山遊びの記憶』を書いた明治十八年夏といえ、自由民権の壮士たちと袂をわかつ時期である。後年、透谷はその時のことを『三日幻境』で次のように回想している。

「三たび我が行きし時に、蒼海は幾多の少年壯士を率ひて朝鮮の拳に与らんとし、老崎人も亦た各国の点取に雷名を轟かしたる秀逸の吟詠を廃して、自村の興廢に關るべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて、我は既に政界の醜状を悪くむの念漸く専らにして、利劍を把つて義友と事を共にするの志よりも、静かに白雲を趁ふて千峯万峯を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に余りしかども、私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行、われは髪を剃り箆を曳きて古人の跡を踏み、自から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に与らざりしも、我が懷疑の所見朋友を失ひしによりて大に増進し、この後幾多の苦獄を経歴したるは又た是非もなし。」

透谷は大井憲太郎を首領とする自由民権急進派の渡韓計画を、親友大矢正夫（蒼海）から打ち明けられ、一行に加わることを勧誘されたが、懊惱のあげく、ことわった。渡韓計画は非法の陰謀であるから、秘密を知っている人間が計画から抜けることは、裏切を意味する。当然、制裁のあることも覚悟して、透谷はことわりに行つたにちがいない。「髪を剃り箆を曳きて」といふ、一見、大仰な身振りも、その覚悟のあらわれだろう。「古人の跡を踏み」とは、日頃敬愛していた西行、二十三歳で鳥羽院北面の武士から出家遁世した中世の詩人に倣つたというのであろう。

それは透谷の生涯に忘れがたい時期であつた。しかし、それが明治十八年の夏から秋にかけての頃であるのはまちがいないが、正確に日付を推定することができない。『富士山遊びの記

臆」が書かれたのが、渡韓陰謀からの離脱以前か以後かも、はっきりしないが、私は以後と想像する。以後、それも直後である。(註一)

透谷は悩み、疑い、政治運動に託した彼の思想的足場から滑り落ちたとき、行為を断られた人間、しかも生来ものを考え、表現欲を人並以上にもっていた人間が、内部からせきあぐる衝動に動かされて、『富士山遊びの記臆』を書いた、と思う。

政治運動に託した思想、と私は言ったが、それは透谷の言葉に即せば「アンビション」ということなるう。

明治二十年八月十八日の石坂ミナ宛書簡草稿には、少年期以来、透谷をとらえた「アンビション」の歴史が告白されている。たとえば、透谷が自由民権運動に託した「アンビション」については次のように書いている。

「此時のアンビションは前日の其れとは全く別物にして、名利を貪らんとするの念慮は全く消え、憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ、万民の爲めに大に計る所あらんと熱心に企て起しけり」。これが明治十七年の、もつとも激しく燃えさかった「アンビション」の姿である。しかし、「翌明治十八年に入りて生は全く失望落胆し、遂に脳病の爲めに大に困難するに至れり」という仕儀になる。これが渡韓計画からの脱落を契機とすることは言うまでもない。

先に引いた漢詩の第十句目の「男兒国」が、あり得べかりし日本である、と書いたが、以上

はその背景の粗描である。

「男児国之民」という言葉には、「憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家」という
気概がこめられている。

ところで、詩は後半になって、神をともない「雲間東方国」へ降りてくると、神の容貌に嘲
りの色が浮ぶ、という。

男児心腸追日軽　男児の心腸日を追て軽し
美酒為池悉沈酔　美酒池を為し悉く沈酔す

現実の日本は腐敗し、男児の心は輕佻浮薄に流れている。そこで、神が奇薬を整合し、投与
すると、

此薬能振男児心　此の薬　能く男児の心を振り
使胸中綽々　胸中をして綽々たらしむ

この二句、とりわけ、「男児の心を振り」という言葉は、これより二年前明治十六年に書か
れた七言絶句を思いださせる。

自笑身世一蜉蝣

自ら笑う 身と世は一蜉蝣むし

生死窮榮何必憂

生死窮榮 何ぞ必ずしも憂えん

区々丹心堅鉄石

区々たる丹心 堅きこと鉄石のごとし

一鞭又足振神洲

一鞭 また神洲を振うに足らん

この壮士風の慷慨に、当時の透谷の「アンビション」の姿をみることができるとして、「一鞭 また神洲を振うに足らん」の夢想、野心は、「此の菓 能く男児の心を振り」の奇蹟を願望する心に尾を曳いている。

しかし、それは次の一句、

夢乎也惘々

夢か乎もまた惘々

で、もはや夢想にすぎないという。ここに二年前の七言絶句との距離がある。透谷はすでにそれが夢であったという自意識を抱いている。

不得奇薬我常悩

奇薬を得ず我常に悩み

尚侍五尺杖

なお五尺の杖を恃むたも

富士山での漢詩はここで終っている。政治的理想に託した夢、「アンビション」からの覚醒によつてもたらされた、透谷を不断に襲う苦悩がのこった。しかしなお、「五尺の杖を恃む」という。「五尺の杖」とは何であろうか。端的には、富士登山の旅装、「すぐ笠雨蓑草鞋脚半五尺之杖」を「持ちながら歩み」（はかなき）かひなき甲洲路かひ」うんぬんという、紀行文の冒頭の五尺の杖である。

しかしまた、紀行文の中に、「柔しき心の志士どもが今やつのならば残忍なる血の雨降らす不幸にも出合わぬ者にもあらぬかし、とハ云ふものゝ此身には五尺の杖ハ唯一本少しも曲らぬ杉の杖」うんぬんとある、生来の頑骨を暗示する。しかしその頑骨が過激民権派の志士たちとは相容れぬ、自分は自分だという自恃をも示唆している、そんな杖でもある。

ところで、先に二年前の七言絶句を引いたが、同じ時期のもう一つの七言絶句に、次のようなものがある。（この二首は、透谷数え年十六歳の肖像写真の桐箱の蓋の表裏に墨書されたものであるという。）

世途困難復奚疑

世途困難 また奚ぞ疑わんいづくん

志存濟時望不羈

志は濟時に存するも不羈を望むさいじ

三寸篋裡蓄真影

三寸の篋裡たまぐらひ 真影まかげを蓄たくわう

何論青史姓名垂

何ぞ青史に姓名なまを垂たるを論ぜん

先に引いた七言絶句と較べ、こちらの方にはより内省的な透谷の姿が感じられる。先の七言絶句の壮士風の慷慨と対照をなすパトスと言うこともできるだろう。

「志は済時に存するも不羈を望む」、経世済民の志と、何であれ束縛を嫌う心とが同居している。「不羈」を望む気持は、功名を得ることも権勢を得ることも、束縛と感じたことは言うまでもないが、民権壮士たちが振りかざす大義名分にも、自分を束縛するものを感じていたにちがいない。まだこのとき、透谷はそれを充分に自覚していなかったかもしれないとしても。

自分は自分でいたい、というのが「不羈」の望みだったろうと思う。「何ぞ青史に姓名を垂るを論ぜん」、後世の歴史に名を残そうが残すまいが、そんなことは取るに足らない。尤も、こういう詩句は、志士の慷慨の述志によくある常套的表現と言えないこともない。いや常套的表現と言っている。透谷の漢詩はうまくない。独創的でないことは言うまでもない。『楚囚之詩』や『蓬萊曲』の独創的な新体詩を標準にすれば、漢詩は取るに足らない。漢詩の他に伝統詩のころみに俳句が少数あるが、俳句を無視できないのとおなじ意味を漢詩に見いだすことができるかどうか、疑わしいのである。しかし、漢詩は、透谷が生涯のいちばん最初にこころみた詩形式であり、彼が自由民権運動に関りをもっていた時期の情念、あるいはエートスを